七名八体

特別
へ5
6590
100

へ5
6590
100

八俵

一 神りさいハつて 榊木ゐつきり
二 主第一垣根ゐ ゐとりもの

一 主婦

解云榊木ゐ垣い主婦の附よりて主婦の
解ものハ垣根ゐ ゐよりもいく榊木ゐ主の
ゐ榊ゐ

二 ゐ和

神りさいつて榊木ゐつきり
法ものゐ時つ居りつ和ゐ和主
解云曰神ゐ主ゐ主ハ主和の附よりてきり和て
神のさきゐ居ゐ主へ

三 雪

袖うちはらつて梅木のもとをはらふ能の名ノ所

解曰所々能の名ノ所にて皆りかるゝ

袖のさゝらるゝ姿の為なり

四 時ふ

袖りさゝらつて梅木のもとをはらふ

陸奥ゝ名ノ所にて皆りかるゝ

解曰所々名ノ所の時ふ所にてうゝ名ノ

梅木の為なり

五 宴お

袖りさゝらつて梅木のもとをはらふ

柔の世も移り〳〵先めれい様の為

解曰所々梅木のもとを祝はれて舞

六 西行

袖りさゝらつて梅木のもとをはらふ

分かりよ柔の家をもて言かなり

解曰所々仲光の家をもて分なる為なり

又あつて梅木のもとを附るもの字

ゆへ所さらるゝ〳〵袖を仲光の為にて梅木の

所にさゝらるゝ為なり

光り仲成へ

七 主人

袖りさゝつて梅木のもとをはらふ

誉のもとをはらふ双帝りの梅面

あちらなる世のさゝめて右くしさる梅木し

むさふ形とてあるゝ面を光の所も形あ人と餘の

ゆゝを梅木のうゝをふ〳〵て面を見れい情を寄て為なる

見るへ

解云附は神うさいはつてうるふ性の沿あり　弟子は
梅木の言解し　備西ハこてらせ水て梅木ちつをうと
その為なり

八

時位の一体を屋敷屋敷にあるゆふして為とい
神りさらつて梅木ちつをう
ハ今ちゆんてもの耳の風
評に四位の中を席ふ蔵年あやゆやとみるといく
いかを附あるをしそれを一座の時位をして合あり
書留の秘は書留の秘
いかよ武相市と附れいちを定に時位の一体とよい
書留の秘は自由う為をの徒
え徒ちてもゆふ　ゆふ　あるへ

紀るのさをを附て為ちを法しちを
見を附合の時をといふるれハ書をを
立接を為の秘は中の紙ちいるをり
かるをしこ三里の紙ちいるをり
附師の附う為物ちる幼子の弟絶
見ちて為しちを

七名

神りをつて梅木ちつをう
双弟子は信しの附正の時をを
解云附をを人弟方ハ向附して双弟人を附て
向ちを附正の時を向せをるり

向附

二
起情

袖さはつて梅か香つきけり
粧ひし恋の手別をいとけなさ

解曰 娘らしきを見付て袖さはつてけるより粧ひの恋も
かの恋にして梅か香つきけりとうつし恋の起情と見えし

三
有心付

袖さはつて梅か香つきけり
哥詠て娘の憐れの身を寂ひ

解曰 袖さはつてけるは娘なるんと附て哥よむ句作よりて
かの寂ひは梅か香にうつきけりや前句をうごかさぬ附を
有心付と云ふなるべし

紹年えて死庵の秋の空
尋ねられて山住む和尚のふうみつき

ふうみつきより前句をどうごかさぬ見を有心附と申なり

四
会釈

袖さはつて梅か香つきけり
月夜出て山住れと路次の小ぎぬり

解曰 袖さはつて梅か香つきけりと云へば恋人の関と附出し
梅か香つきけり此は小袖のありの路次へ会釈なり
句作の間にて用の用ゐるべし

五
遁句

袖さはつて梅か香つきけり
てつりと見えて寛にころし

解曰 遁句がすなはち付て遁句べし 袖さはつてとは
あいてある故なれて てつりと前句に附けて遁る
べし 句作をよくよく見分けれ 寛をしみて軽く作るべし
句作よく付れは遁るまて一巻をきれ まるくと作るべし

六
拍子付

袖さはつて梅か香つきけり
それそうへ出るとる猫の恋そり

解脱梅ものがたりのもつとふるくして京師の梅子書
あるべし新編梅かゝりとへ諸説の物語り
なり他にもまた一巻ありとこれは梅子書て都にへし
亀立ハ新説の奇をいとおもしろの京名所京名所亀立と
こゝろへ
旅をハ吉野にて桜を見川の宮人
もとゝ西行ハ
亀立の名所とゝ
吉岡の宿ゝ
かゝるゝ新説の始也
解脱吉岡の中をかりへとを附て新説ハ吉岡の
亀立とゝへ
右七名ハ体ハ梅子門の秘法にして他人を
ゆるさゞる也つゝして字聲変して
ゝ
右此書ハ鎌倉庵師匠直清
天保二年癸卯月末の三日の歌 美濃 イヒ 梅二子
宗匠を新説として
ゝ書三人ゝ
ゝけて六の井の口示遠菊ゝ

師と友に接するの快あるの秋　南三

一度ゝ面あらんを為めの也　緑風庵

黄雲に月の日数ふるまゝ　青志

ちらつく眼先枝さき　酔

お枝と敷よみ合るかな　支麻

流る和漢光陰の水　紀隆

ふるゝ神の魂目に敷て　雲三

動善情況婦人の意想　隆

志

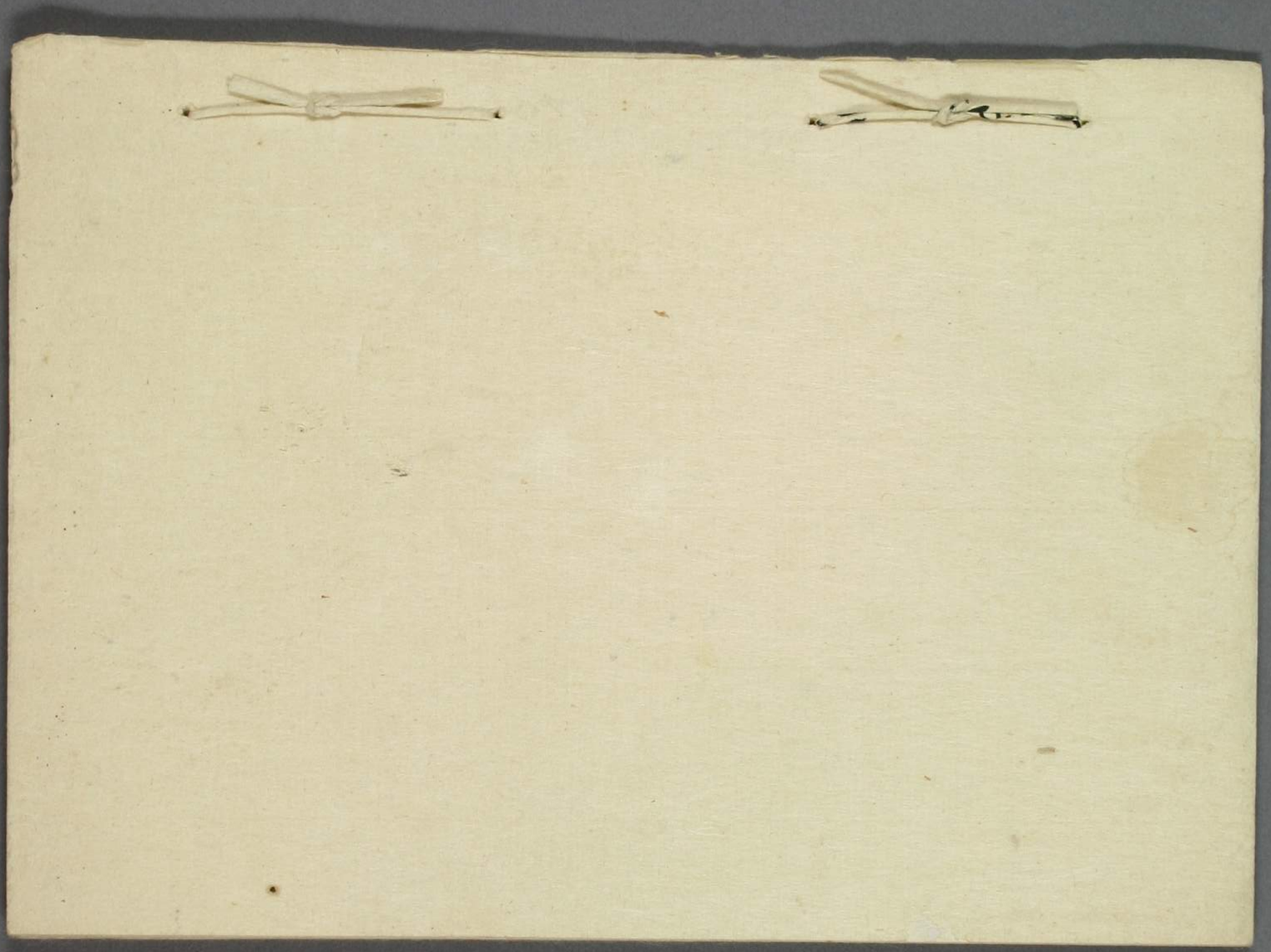
あちきの原氏の世と引ふる　鹿

蕃屏の結ひ千矣柳よ　東

何らしの三笠とよみし掌遥　鹿

しる人をとゝ南極の映り　〃

産所の瞳み二つを芝みて

七命のめへあるも君ら代　青陳

歌文を注解をとあり